

令和三年度十一月の読書会のテーマ

「たのしみ、うれしさについて考える」

目的…何気ない日常の中で感性を磨くため

今回の読書会は、九月の読書会の「ひとつにつながっている生と死」「天国と地獄」(東日本大震災について考えてみる)から繋がる「何気ない日常の中のたのしみ、うれしさ」について考えてみたいと思います。

○『たのしみは日常のなかにあり』

九月二日の読書会の全職員の感想文シートを読み、とても心動かされました。東日本大震災というとても重い人の生き死にという内容でしたが、一人ひとりの感性の違いや感じ方を今回も感じるとともに、その中に実体験からくる「かなしみ」について心揺さぶられる感想文がありました。

ある日、突然、もっとも大切な存在の人を失うということが、どんなに辛いのか、人間にとっての最大のストレスと言われている。

今回の読書会は、そのような「かなしみ」をしつかりと体験した人が味わうことができる何気ない日常の中の「たのしみ」や「うれしさ」を共有できるような読書会にしたいと考えています。

個々人の「たのしみ」や「うれしさ」を発表していただく材料となる題材として、『たのしみは日常のなかにあり』という本の中に紹介されている橘曙覧たちばなあけみさんの歌を感性を磨く一助にしたいと思います。

○和歌

橘曙覧さんは、幕末に生きた歌人です。生前はゴッホさんのように無名のままに亡くなった方です。

『独楽吟どくらくぎん』(独り楽しめるうた吟)が、シンプルでよく知られています。

「たのしみは」で始まる五十二首のシンプルな飾りのない歌です。

「たのしみは

妻子めこむつまじく

うちつゞひ

頭かしらならべて

物をくふ時」

○橘曙覧さんの生涯

江戸時代の文化九年(一八二二年)に生まれ慶応四年(一八六八年)に亡くなった歌人で国学者です。

越前福井の裕福な墨や筆等の文具を扱う商家に生まれています。二歳の時に母親を亡くし、母親の実家に預けられています。父親はすぐ再婚し異母弟が生まれています。しかし十五歳で父親を亡くしています。父親の死と同時に伯父に生家に戻されますが、あまり馴染めなかったようです。

生活場所として居心地が悪かったことと商いが嫌で何度か家出をし、その都度、伯父に連れ戻されたとのこと。

裕福な商家を長男なのに継がず、異母弟に家業を二十八歳の時に譲ります。

歌人の道を歩むために弟子入りしましたが、すぐに師匠を超えてしまい、師匠が弟子になるような歌人としての才能に恵まれた人でした。

優秀な人材であることを見抜かれ、越前福井藩藩主の松平春嶽さんに城勤めの勧誘をされますが、辞退し続けました。

貧しくとも、歌人として家族と慎ましく人生を送ることにこだわったからです。

二十一歳の時、四歳年下の直子さんと結婚しています。双子の女の子が生まれていますが産後すぐに亡くなっています。その後、三女健子さんが生まれますが健子さんが四歳の時に病死しています。

その後、男の子が三人生まれすくすくと育っています。

家族との暮らしを大切にし、歌を詠み、家計は門弟からの収入と寺子屋での収入だけだったので清貧の生活を一生貫き通しました。五十七歳の時に静かに亡くなりました。

○橘曙覧さんを理解する

わたしなりに橘曙覧さんについての理解した内容を述べさせていただきます。目的は、彼の人生、生き様を理解することで感性を磨くためです。

彼が生まれた家は裕福な商家であり、そのまま家業を継げば経済的に困ることのない一生を過ごすことができました。

実際、十五歳の時、父親が亡くなってから伯父が後見人となり家業を継ぎます。

しかし家業が肌に合わず、伯父が亡くなると二十八歳の時に異母弟に家督を譲ってしまいました。

家督を異母弟に譲る前に、初めて授かった双子の女の子たちを夭折したことも原因

となったとも考えられます。

その後は歌人として生きることを目指して幾人の師匠の元に弟子入りします。

二歳の時母親を亡くし、十五歳の時父親を亡くすという大切な人の喪失体験を繰り返し経験しました。

そのような体験から人の生き死にという無常を体験し、商いではなく人生の意味を味わい考える和歌の世界に浸ることにひかれたのだと感じます。

また人生早期から大切な肉親を失う体験により、人よりも家庭を大事にする渴望が強かったように思います。

三女の健子さんが四歳の時に突然の病(天然痘)で亡くし茫然自失になっている時に、次の和歌を詠んでいます。

「きのふまで

吾が衣手ころもてにとりすがり

父よ父よと

いひてしものを」

大切なわが子を突然病気で失った悲しみが滲み出た和歌です。

二歳で母親を、十五歳で父親を、親になっても三人のわが子が続けて失った悲しみが深いから、前述の和歌にひときわ様々な感慨深い思いが募るのだと感じます。

「たのしみは

妻子むつまじく

うちつどひ

頭ならべて

物をくふ時」

橘曙覧さんは、日常のなかのささやかなたのしみやうれしさを大事にしました。

それは子ども時代に家族関係に恵まれなかった反動があったからのように感じます。生活するところも母親や父親の死によって突然、変えられ居場所のなさや疎外感を人生早期に感じていたのかも知れません。

彼にとっての「たのしみ」や「うれしさ」は、経済的に裕福になることではなく、何気ない日常の中で些細な一瞬一瞬の幸せを味わい尽くすことでした。

見栄や驕り、権力欲や名声を求めることの無常さを悟っていたかのように、日常の中の当たり前のような瞬間が、実は当たり前ではなく、とてもかけがえのないことだということをお肉親やわが子の死を通して感じ取っていたのだと思います。

○橘曙覧さんの功績（現代への影響力）

橘曙覧さんは、国学者の本居宣長さんを尊敬し、本居宣長さんの門人に弟子入りしました。

その和歌の実力は越前福井藩において知られることになり、幕末に将軍（徳川慶喜）を補佐する政事総裁職に任じられた松平春獄が自ら、橘曙覧さんの粗末な藁家を訪れ

たほどでした。

橘曙覧さんの死後、息子さん（長男）が橘曙覧さんの和歌集を編纂しました。

この和歌集を目にして感銘を受けたのが、明治時代の天才と言われた歌人の正岡子規さんです（夏目漱石さんの親友として有名です）。

正岡子規さんが惚れ込んで『日本』紙上に発表した『曙覧の歌』で「源実朝以後、歌人の名に値するのは橘曙覧ただ一人のみ」と絶賛しました。天才が天才を絶賛したと言われたエピソードです。

気取ったり、さもらしいような歌を詠むのではなく、日常のなかの何気ない場面を率直に等身大の描き方をした飾り気のない橘曙覧さんの境地を正岡子規さんは絶賛しました。

橘曙覧さんは、歌の心は「誠」にあるとしました。

『いつはりの

たくみをいふな

誠だに

さぐればうたは

やすからむもの』

（心に偽ったもの、また技巧を加えて歌うな。事象の中にある誠を誠の心をもって求めれば、歌はやさしいものである）

「歌は、定まった型や言葉の装飾を重視するのではなく、感動したことをそのまま素直にとらえて詠むものである。そこには人生の深い趣きが醸し出される」という橘曙覧さんの和歌に対する考え方を正岡子規さんは絶賛しました。

飾り気のないありのままの気持ちを吐露した和歌に次のような和歌があります。

「たのしみは

いやなる人の

来たりしが

長くはをらで

かへりけるとき」

そしてそれから百年ほど経った一九九四年、明仁天皇、美智子皇后がアメリカを訪れた時に、クリントン大統領が歓迎の挨拶で、橘曙覧さんの歌を引用し歓迎しました。

「たのしみは

朝おきいでて

昨日まで

無かしり花の

咲ける見る時」

クリントン大統領は、「一日一日新たな日

とともに、確実に新しい花が咲き、物事が進歩し、日米両国民の間の友情が育まれる」ことの期待を橘曙覧さんの和歌で表明しました。

正岡子規さんに絶賛された明治時代から百年ほど後に、クリントン大統領によって再度、橘曙覧さんが世の中で注目を浴びた瞬間でした。

そして二〇〇〇年四月に福井県福井市に「橘曙覧文学記念館」が開館しました。

彼の死後百三十二年経過しての出来事です。

橘曙覧さんの一生を振り返ると、

ほんものは、どんなに時が経ってほんものとして扱われることを証明した稀有な人なのだ感慨深い気持ちになります。

○「たのしみ、うれしさ」の共有

今回の読書会は、グループ討議なしに、一人ひとりの「たのしみ」や「うれしさ」を和歌の形にとらわれない中で一分間のスピーチとして発表しあい、お互いの「たのしみ」や「うれしさ」の出来事を共有する時間にしたと思います。

読書会の目的の一つに、一人ひとりの感動を共有することにより、お互いがお互いに影響を与え合う恩恵があることを私は感じ始めています。

私は今強くその手応えを皆さんの感想文シートから感じています。

全員の感想文シートをサーバを使って見ることができるようになりました。

今回の感想文シートには、簡単な感想の後に、簡単な「たのしみ」「うれしさ」のエピソードをご紹介いただきたいと思えます。

最後にそのお手本として橘曙覧さんの和歌を一つ紹介させていただき終わりたいと思います。

「たのしみは

三人の児ども

すくすくと

大きくなれる

姿みる時」

一分間スピーチのコツとして、もう一度、橘曙覧さんの言葉を引用させていただきます。

「歌は、定まった型や言葉の装飾を重視するのではなく、感動したことをそのまま素直にとらえて詠むものである。そこには人生の深い趣きが醸し出される」

最後までお読みいただきありがとうございます
ました。

(おしま
い)